

春東京祭 東京・春・音楽祭 2026

Spring Festival in Tokyo

ショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲

弦楽四重奏曲 第 11 番

「弦楽四重奏曲 第 11 番」（1966）は、ショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲を多数初演したベートーヴェン弦楽四重奏団の第 2 ヴァイオリン奏者、ワシリー・シリンスキーの追悼のために書かれた。全 7 楽章で構成され、「第 1 楽章：イントロダクション（Andantino）」「第 2 楽章：スケルツォ（Allegretto）」「第 3 楽章：レチタティーヴォ（Adagio）」「第 4 楽章：エチュード（Allegro）」「第 5 楽章：ユモレスク（Allegro）」「第 6 楽章：エレジー（Adagio）」「第 7 楽章：フィナーレ（Moderato — Meno mosso — Moderato）」の順に、アタッカで（切れ目なく）演奏される。

弦楽四重奏曲 第 12 番

「弦楽四重奏曲 第 12 番」（1968）は、伝統的な調性と十二音技法を融合させた独創的な作品。ベートーヴェン弦楽四重奏団の第 1 ヴァイオリン奏者、ツィガノフに献呈された。全 2 楽章構成だが、第 2 楽章が全体の約 4 分の 3 を占める。「第 1 楽章：Moderato」は、チェロが 12 音の音列を提示するが、すぐに変ニ長調の穏やかな主題へと移行する。全体として静かで内省的な性格が強い。長大な「第 2 楽章：Allegretto」では、4 つのセクションが途切れなく続く。まず激しいトリルや急速な音型が支配するスケルツォで始まり、葬送行進曲のように深い悲しみと絶望が表現されたアダージョが続く。そして、第 1 楽章の主題や断片が夢のように再登場し、これまでの音楽を統合する回想部を経て、フィナーレでは 12 音技法のモチーフを駆使しながら、最後は力強く肯定的な変ニ長調で締めくくる。

弦楽四重奏曲 第 14 番

「弦楽四重奏曲 第 14 番」（1973）は、ベートーヴェン弦楽四重奏団のチェリスト、セルゲイ・シリンスキーに捧げられたため、チェロが主導的な役割を果たす。全 3 楽章で構成され、まず「第 1 楽章：Allegretto」は、快活で遊び心のある主題で始まり、チェロとヴィオラのカデンツァが登場しながら、緊張感を持って展開する。緩徐楽章に相当する「第 2 楽章：Adagio」では、第 1 ヴァイオリンとチェロによる情熱的な二重奏が中心となる。前楽章から切れ目なく演奏される「第 3 楽章：Allegretto」は、自作の歌劇《ムツェンスク郡のマクベス夫人》のフレーズが引用され、最後は静かに消え入るように終曲する。